

〔共同研究〕

# 仏教文化におけるメディア研究会 中間報告

## 一、研究目的

仏教文化におけるメディア研究会では、近現代のメディアから読みとれる、時代とともに解釈と改訂が重ねられ、再生産されてきたブツダに関する表現を事例とし、仏教的人物の表象が創出する仏教の文化的イメージとそれが社会へ与えた影響について考察している。

十五世紀のヨーロッパにおいて実用化されたヨハネス・ゲンズフライシュ・ツール・ラーデン・ツム・グーテンベルク (Johannes Gensfleisch zur Laden zum Gutenberg, 一三九八頃—一四六八) の活字印刷技術については、「教会による学問・思想・教養の独占を終わらせ、宗教改革をはじめとしたさまざまな社会変容をもたらしたこと」<sup>①</sup>が知られている。以来、知識を普及し、文化を牽引したのは、書物をはじめとする印刷物であった。ところが二十世紀に入ると、科学技術の発達により多種多様なメディアが出現し、活字を主体とした印刷物は、他媒体との影響関係に置かれ、メディアを越境したコンテンツ展開を見せるようになる。

近現代に起きたメディアの多様化は、情報の伝達と受容、創作に臨む環境、知の条件と思想をめぐる捉

え方など、人間社会のあり方と文明の成り立ちを変えてしまうほどの大きな世界の転換をもたらした<sup>②</sup>。このポストグーテンベルク<sup>③</sup>と呼ばれる潮流のさなか、諸媒体からは、実にさまざまな仏教をモチーフとしたテキストやイメージが生み出され、布教、教養、修身、娯楽など、さまざまな目的をもって人々に受容されている。このなかには、ブッダに関する表象も存在しており、仏教の文化的イメージを形成するものとして、今もなお、時流や世相に合わせた改訂と再生産がなされ続けている。

本研究会では、そのような創りかえられる仏教的人間の表象へと反映された思想、価値観、習俗、政治、経済、教育、娯楽、芸術、学術、性別などのイデオロギー的諸観念<sup>④</sup>について読み解いていく。この考察を通して、国家、民族、階級、業界、組織、或いは、それらを越境していく人間関係の総体として現れる社会空間の中で、時代的趨勢に応じて形成された宗教表象が、媒体を介して、個人や集団へ受容されていくプロセスを探り、近現代という時代のある共同体や言説空間で共有された仏教の文化的イメージについて明らかにしたい。

## 二、仏教文化を牽引するメディアの力

仏教と社会のつながりについては、すでに仏教学、仏教史学、仏教美術史などの諸分野でも言及されており、これまで蓄積されてきた膨大な研究成果が、仏教に関連する学知の基盤をなしている。しかしながら一方で、細分化された既存の学術領域では、とりこぼされている事例も多々あり、特に日常生活のなかで、一般の人々が接するような仏教文化の諸現象については、その全てを総覧しきれていないのが現実である。そのなかで近年、新たなテーマとして脚光を浴びているのが、メディアと表象が織りなす宗教文化

の研究である。

仏教史において情報を伝達するメディアは、教主ブツダの存命時より大きな役割を果たしてきた。古代インドにおいて説かれたブツダの教えは、言語・図像・塑像・建築・音響などのメディアを通して宗教者や知識人、権力者だけでなく、文字の読めない大衆の間でも広く受容され、世界各地に教線を拡大する。その過程では、時代や地域により異なる価値観、習俗と接触し、時に反発と葛藤が生じながらも文化的融合を遂げ、当初の形態からは変容した信仰形態になっていく。

有史以来、人間がコミュニケーションに用いてきたメディアは、異文化圏を越境し、世界各地の風土や生活と交わることで多元性を帯びていった仏教を、現在にいたるまで可視化し続けている。諸媒体は、媒介作用によって観念的な教理を身体的に認識可能な言語や形象としてかたどり、不特定多数の人々がその信仰に接する状況を実現する。だがそこで伝えられる内容が難解な教理、思想ばかりでなかったことは、多様な仏教のコンテンツが生成されてきたことからもうかがい知れる。

本研究会が目指すブツダや宗祖などの仏教的人間像は、人々がメディアを介して接するそのような仏教文化のなかで生み出されてきた表象となる。目に見えない人間の観念を具現化して表現し、情報を伝達する手段として技術的発達を続けてきたメディアは、近現代の世界においても、いまだに仏教を牽引する力となり続けている。これに関して宗教学者の岡田正彦は、近代以降の仏教史において、人間の経験や活動を拡張するメディアの情報伝達と、その技術発展とが新たな思想を生み、社会制度の確立へ寄与してきた事実<sup>⑤</sup>を指摘する。

近代日本の黎明期以来、新しいメディアの登場と普及は、いつも仏教／宗教思想と人々とのかかわ

りに少なからず影響を及ぼしてきた。最近ではインターネットや携帯電話の普及など、新しい技術の登場は際限なく新たな言説空間をつくりだし、不可避免に人々と仏教／宗教のかかわり方を変えていく。<sup>⑥</sup>

美術史家の太田智己は、明治十年（一八七七）に東京大学が創立されて以降、官立大学、職業専門研究者、実証的研究、学術雑誌、学会組織、博物館・美術館、研究資金などの総体として近代アカデミズムのシステムが形成され、知的エリートの言論空間が構築されたと述べている。これにより定常的に生産されるようになった学知は、アカデミックな学術界や知識人の交流内部に留まらず、近代以降のメディアを通じて、広く一般の人々へも発信されるようになる（図1）<sup>⑦</sup>。その流れは、学術書や教養書のみならず、新聞、小説、雑誌、映画、ラジオ、絵本、紙芝居、マンガといった娯楽分野へも及び、岡田のいう「仏教／宗教思想」も含むアカデミズムの学知が、さまざまな宗教表象の基盤をなすイデオロギーとしてメディアコンテンツに組み込まれ、消費される情報資源の一つとなっていく<sup>⑧</sup>。こうして絶大な情報波及力を持つ近現代のマスメディアを通じ、さまざまな思想や価値観を内包した宗教表象に接する環境は、整えられていったのである。

### 三、表象の改訂と再生産

西洋近現代美術史を専門家とし、国立新美術館の展示会企画に携わる美術史家の長屋光枝がイメージという概念について指摘するのと同様に、表象（representation）は、イメージ、シンボル、記号、表徴といった言葉の意味に類し、学術分野によって定義の揺らぎが認められる多義的な概念となる<sup>⑨</sup>。美術史学、芸

術学、文学、文化学では、言語、視覚、音響など、何かしらの媒介物を用いてある対象を表現すること、あるいは、ある対象の「代行」「代替」として表し象られたものという定義に限定されることが多い。つまり、表象という概念は、メディア表現により人間の身体内部に生じる観念的な意識、思考、心像などを、物質的に「再現」という意味を持つ。<sup>①</sup> そうした表象に関する先行研究に目を向けると、人文学研究としては、おおよそこれまでに、次の問題が取りあげられてきたと言える。

- ① 観念的イメージを物質的に具現化し、人々に受容させる際に依存するメディアの技術的諸条件(支持体メディア)<sup>②</sup> にもとづいた表現の問題。
- ② イコノグラフィ(図像学)やイコノロジー(図像解釈学)、記号論的観点から考察した表象の意味作用。
- ③ 既存の物語、同業の作者、潜在的あるいは想定外の読者、社会階級、支配的な文化的知識などの制  
度化された条件下で、人間が恣意的に解釈し、操作することで創り出してきた表象の事例と変遷。
- ④ メディアを通じて蓄積され、再生産される表象が特定の共同体や集団の集合的アイデンティティに及  
ぼしてきた影響と、それによって生じる権力関係。

右記にあげた課題に取り組むメディアと表象の研究は、すでに広範囲の諸分野で確認されている。なかでも物語表象<sup>③</sup>の再生産に関して示唆に富む論考を発表しているのが、比較文化学者のジャック・ザイプスである。民俗学的な立脚点から、おとぎ話という物語形態に見出される社会的・政治的機能について考察するその研究では、「ある世界観、歴史全体を見通すある視点、あるイデオロギー」<sup>④</sup>を物語にまと  
わせる象徴行為<sup>⑤</sup>として書き、語られ、文芸化されてきた、十八世紀以降のおとぎ話(メルヒェン、Märchen)

をとりあげる。彼の著書『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』(Fairy tales and the art of subversion : the classical genre for children and the process of civilization, 一九八三年)では、社会や人々の政治的無意識により再生産されるおとぎ話とイデオロギーの議論を始める端緒として次のような疑問を投げかける。<sup>(16)</sup>

作者たちは、どのように、なぜ、おとぎ話を通じて、子どもに、あるいは大人が抱いている子どものイメージに、働きかけようとしたのだろうか。そうした作者たちは、既成のおとぎ話の言説にどう反応し、それを自分たちの要求や社会の趨勢に合うように変える仲介をしたのだろうか。<sup>(17)</sup>

ザイプスの試みでは、権力、支配、規範、秩序、権威といった政治的観点から、おとぎ話を語り直す際に生じる、選択・除外・報償という創作行為の歴史的プロセスに関しての人々の認識を理解しようする。<sup>(18)</sup>つまりそれは、再話(story retelling)行為により、おとぎ話という物語表象が人為的に操作される過程に介在してきた、時代や地域ごとの社会的条件に方向づけられる人間の創造力や恣意性、欲望を解明する研究となる。

再話とは、読んだり聞いたりした特定の内容を、現代風に書き直し、語り直すことであり、伝統的な物語の継承と改変を試みる再生産の行為となる。また、児童文学研究では、民話を子どもが理解しやすい表現に変えるという語義で用いられることもある。<sup>(19)</sup>ザイプスは、神話及びおとぎ話といった物語の再話が、社会的、政治的、文化的要因と絡み合う特定の動機によってなされてきた歴史を次のように述べている。

古代社会、異教の部族、異教の社会の産物だった神話は、口頭で伝承されたが、結果的にはキリスト教、家父長制養護の書き物にされてしまった。神話はある動機のもとに見直され、再秩序化され、洗練される過程を経てきたし、今もその途上にある。<sup>20</sup>

物語は、それが繰り返し語り直されるなかで、時代の変遷や地域の差異により移り変わるイデオロギーを取り込み、新たな解釈が加えられ、再生産される。<sup>21</sup>こうした物語の再話には、複製と改訂という二つの手法が見られる。その一つである古典的おとぎ話の複製は、「伝統的なものの見方、信条、行動を強化する類型的な思想やイメージの再生を」図る行為となる。これに対して改訂は、「書き手の批判的で創造的な思考を組みこんだ新しい何かを作り出す、という目的をもっている。古典的おとぎ話の改訂版は、価値観の変化に応じて、伝統的な類型、イメージ、記号に対する読者の考えを変えようとする」ものとして成立するのである。<sup>23</sup>

#### 四、再生産され続ける宗教表象

ザイプスの再話研究は、物語やそこに登場するキャラクターに留まらず、歴史、記憶、伝統、イメージなどといったあらゆる表象の再生産において、その時代の人々が共有する支配的価値観や社会の趨勢へ適応させる恣意的操作が行われてきた歴史を明らかにする。<sup>24</sup>ここでは、誰がどのような立場の視線や背景から、いかなる意味が読みとれる表象を複製・改訂してきたのかという問題が論証の中心に据えられる。<sup>25</sup>

こうした論究は、テキストやイメージの表現からコンテキスト（社会文化的文脈）を読みとり、その意味



内容に潜在する政治性、個人や集団の主観といった諸観念を暴くイデオロギー批判に分類される。<sup>(26)</sup>メディアにより再生産され続けているある特定の表象は、いかなる社会とのつながりのなかで改訂されるのか。また、それによって変容した表象は、どのようなものとして具現化され、人々に受け止められるのか。今日、このような問いは、仏教の媒体表現を考察する研究においても、とりあげなければならない問題意識となっている。なぜならば、近現代のメディアが生成してきた仏教的人間像もまた、社会の規範や制度に即し、その時代の支配的な思想や慣例、人間の欲求、権力構造、世の有様などを反映しながら再生産されてきた表象だからである（図3）。

近代西洋の啓蒙思想や実証主義的な学術規範が世界規模で拡大し、超現実的な靈驗奇瑞に懷疑的な眼差しが向けられた近代の日本では、仏教という信仰世界の捉え方にも大きな変化が生じる。そのなかで、ブツダという存在は、十九世紀におけるヨーロッパの実証主義史学と高等批評のなかでイエス・キリストと対比され、一つの宗教を確立した実在の歴史的人物として再定義される。<sup>(27)</sup>こうして形成された近代的ブツダ観は、同時代のメディア表現へも投影され、仏教を開いた創唱者としての教主像が流布されていく。<sup>(28)</sup>

学術的知見、政治思想、生活習俗など、さまざまな制度的イデオロギーが織り込まれたキャラクターとして仏教的人物を表現する傾向は、僧侶、信仰者といったその他の仏教的人間に関する表象にも同じく見られる。<sup>(29)</sup>メディアによって示されるブツダ像は、過去に実在した本人の生涯や記憶を忠実に再現したものとしてではなく、各時代の読者の関心や世相を反映して形成された人工的な「代替」的創作物となる。<sup>(30)</sup>つまり、ブツダの表象は、時代の諸観念に合わせ、嗜好形式、解釈の図式、観念や価値の体系、象徴形式、集団といった関連づけの枠組みに応じた形態、類型、イメージ、記号として表現されているのである。<sup>(31)</sup>



## 五、文化的所産としてのブツダ像

比較文学者の川口久雄は、絵解きという分野において「祖師伝というもの、また高僧伝というものは、何ほどかは極言すれば一種の仏伝<sup>③2</sup>」であると述べる。また、国文学者の菊池良一は、「日本の僧伝において釈尊伝がもつような異聞異時をその伝記に結節させて記すことは、まさに聖徳太子をもつて嚆矢とする。…（中略）…その太子に釈尊伝がもつと同じような奇瑞異聞が語られるということは、それ以後における日本僧伝の形態を指向せしめるものとして注意すべきことである」<sup>③3</sup>と発言している。

川口と菊池の指摘からもうかがえるように、ブツダという存在は、あらゆる仏教的人間像の根源をなし、古代から現代へと伝えられ、現在もなお、宗祖、高僧、宗教者、信仰者などに関連する表象の雛形となっている。

メディアの多様化に伴い、諸媒体から仏教に関する大量の情報が拡散されるようになった近代に入ると、宗教者や知識人に留まらず、さまざまな人々がそれぞれの視点や思惑にもとづき、宗祖、高僧、信仰者などをブツダと関連づけて語るようになった。そこからまたさらなる表現の変容、派生、多様化も起こり、今日のメディア上では、実に多種多様な仏教的人間像を目にすることができている。現在も宗教表象は、ある社会、ある集団、諸個人の価値観や世界観が織り込まれたものとして再生産され、人々に何かしらの精神的、感覚的変動を生じさせながら、諸個人のアイデンティティ形成に働きかける神話として機能している。その一つである仏教的人間像をめぐる表象は、不変の信仰と記憶を正確に伝え、再現するものとして複製されるよりも、むしろ時代と共に改訂される、時代や社会を映し出す鏡のような文化的所産として、人々の目の前に現れる。本研究会では、そのようなブツダの諸相を手がかりとして、近現代という時代に

展開するメディアを通じた宗教表象の再生産へと考察の手を加える。

『おとぎ話が神話になるとき』において、ザイプスは、既存の権力関係を強化するものとして生み出してきた物語へ議論を加えるという、複製と改訂の再話に見られる二つの機能に着目している。実際、十九世紀以降、知を正当化する支配的な言説の信憑性は次第に喪失し、メディアがもたらすさまざまな情報により生じた価値の多様化と、個人や集団の複雑な思惑のなかで、表象の再生産は、続けられてきた。表象の生成と再生産は、いかなる社会的背景のなかで起こり、そこにいかなる解釈と改訂が加えられ、社会通念という暗黙の了解のうちに、何を認め、何を制限する表現が形成されたのか。また、この制限が破られる状況とはどのようなものなのか。本取り組みでは、そのような問題にも気を配りながら、多様化する仏教文化の諸相へ光を当てていきたいと考えている。

## 註

- (1) 若尾政希「序章 書物・メディアと社会」島蘭進、高埜利彦、林淳、若尾政希『シリーズ日本人と宗教―近世から近代へ 第五巻 書物・メディアと社会』春秋社、二〇一五年、四頁。
- (2) 石田英敬『現代思想の教科書 世界を変える知の地平 一五章』筑摩書房、二〇一〇年、二六―二八頁。阿部卓也「はじめに ハイブリッド・リーディング」日本記号学会編『ハイブリッド・リーディング 新しい読書と文字学』新曜社、二〇一六年、一一―一三頁。
- (3) 石田、前掲『現代思想の教科書 世界を変える知の地平 一五章』二六―二八頁。  
ポスト・グーテンベルク的状况とは、ルネサンス時代、グーテンベルクにより実用化された活版印刷技術による情報伝達の独占的状况が、新たな媒体の出現によって失われていくという近代以降に起きたメディア環境の歴史的变化を指す。

フランス文学者でメディア情報学者の石田英敬は、著書『現代思想の教科書 世界を変える知の地平一五章』のなかで、マーシャル・マクルーハン (Herbert Marshall McLuhan, 一九一一年—一九八〇) の「グーテンベルクの銀河系の終焉」をあげている。これは、活字が生み出す近代の文化圏が、電気メディア圏により生み出される新しい文明圏によって侵食されていくという、二十世紀のメディア環境に生じた大転換を表す言葉となる。

「グーテンベルクの銀河系の終焉」によって生じたポスト・グーテンベルクの状況は、狭義的に、インターネット、電子媒体、マルチメディアといったデジタル通信メディアの拡大を意味する。しかし本書では、活字と書物がマスメディアの特権的な地位を占めていた時代が終わり、近現代以降に出現した電信、ラジオ、映画、テレビ、インターネットといった多種多様なメディアを横断しながら、人々がコンテンツを創造し、伝達し、受容する状況という広義的な意味で用いることにしたい。

- (4) ルイ・アルチュセール著、西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳『再生産について—イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』平凡社、二〇〇五年、二五二—二五三頁。アンドリュウ・エドガー「イデオロギー ideology」アンドリュウ・エドガー、ピーター・セジウィック編、富山多佳夫訳者代表『現代思想芸術事典』青土社、二〇〇二年、三五頁。

イデオロギーは、自分が存在する世界の全体を意味づける見方・考え方 (パースペクティブ Perspective) の基準となる観念体系・思想形態である。アンドリュウ・エドガーは、国家のイデオロギー装置について言及したルイ・アルチュセールと同じく、「支配階級は、コミュニケーションや教育のさまざまな形態 (たとえばマスメディアや教会や学校) を支配しているために、自らの考えを社会に普及させることができるのだ」と述べている。この指摘は、メディアが生み出すコンテンツに種々の思想や価値観といったイデオロギーが含まれていることを意味する。本書の研究が目的としては、メディアによって物質的に可視化された仏教的人間像をめぐる表象へ人道的に織り込まれた「イデオロギー／世界観」を読み解くことにある。

- (5) 岡田正彦「新しいメディアが仏教を変えた!」大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ—仏教が

らみたもうひとつの近代』法藏館、二〇一六年、七九—八〇頁。

(6) 岡田、前掲「新しいメディアが仏教を変えた!」八二頁。

(7) 太田智己『社会とつながる美術史学 近現代のアカデミズムとメディア・娯楽』吉川弘文館、二〇一五年、一—八頁、一—一三頁。

(8) ブライアン・スタンリー・ターナー、山崎隆広訳「ニューメディアと浮遊する宗教」石田英敬、吉見俊哉、マイク・フェザーストーン『デジタル・スタディーズ第二巻 メディア表象』東京大学出版会、二〇一五年、三〇九頁、三一—三二三頁、三二七—三三八頁。

(9) 長屋光枝「イメージの力—美術館からの視点」『イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる』国立民族学博物館、二〇一四年、二七頁。レイモンド・ウィリアムズ「image 像・概念・象徴・イメージ」レイモンド・ウィリアムズ著、椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳『完訳キーワード辞典』平凡社、二〇〇二年、一五四頁。ピーター・セジウィック「シンボル Symbol」エドガー、セジウィック編、前掲『現代思想芸術事典』一九五—一九六頁。アンドリュース・エドガー「記号 sing」エドガー、セジウィック編、前掲『現代思想芸術事典』六八頁。

(10) レイモンド・ウィリアムズ「representative 代議制・代表・表象的」ウィリアムズ著、前掲『完訳キーワード辞典』二六八頁。井上昭洋「ハワイ人とキリスト教 文化と信仰の民族誌学(一四) 表象と言説」『グローバル天理』第五号(通巻一二五号)天理大学附属おやさと研究所、九頁。

(11) ウィリアムズ、前掲「representative 代議制・代表・表象的」ウィリアムズ著、前掲『完訳キーワード辞典』二六八—二七一頁。

本研究テーマが「表象」ということばに注目しているのは、それが「物質的に再現する」という可視化、可聴化、可触化の意味を持つからである。また、「何かを再現したもの」という意味でとらえれば、表象という概念に包括されるのは、言語表現、視覚表現、造形表現、映像表現、音響表現など、非常に広範囲の表現されたものが、その範囲に

含まれることになる。

- (12) ハンス・ベルティング著、仲間裕子訳『イメージ人類学』平凡社、二〇一四年、二五―二七頁、二九頁、三六頁。

支持体メディア (Trägermedium) は、美術史学者のハンス・ベルティングが、著書『イメージ人類学』で注視した表象・イメージを可視的に再現し、物質的に具現化 (Verkörperung) させる際に依存する「メディア表現の性質を生み出す技術的諸条件」のことを指す。ベルティングは、「イメージの知覚はそうしたメディアの諸性質に基づいて行われ、用いられたメディアによる演出が知覚行為の基盤となる」(三六頁) としている。本研究がメディアを重視するのは、『イメージ人類学』におけるこの概念に起因しており、表象から導き出せる意味だけでなく、表象そのものをめぐる表現のされ方にも注目したいという意図による。

- (13) ジャン＝フランソワ・リオタール、小林康夫訳『叢書 言語の政治① ポストモダンの条件 知・社会・言語ゲーム』水声社、一九八六年、八頁。ウィリアム・ジョン・トーマス・ミッチェル「まえがき」ウィリアム・ジョン・トーマス・ミッチェル編、海老根宏・新妻昭彦・林完枝・原田大介・野崎次郎・虎岩直子訳『物語について』平凡社、一九八七年、九頁、一二頁。ヘイドン・ホワイ特「歴史における物語性の価値」ミッチェル編、前掲『物語について』二〇頁。ロイ・シェイファー「精神分析の対話における語り」ミッチェル編、前掲『物語について』五九―六二頁。高田明典『構造主義がよくわかる本』秀和システム、二〇〇七年、一〇八―一〇九頁。アリストテレス、ホラーティウス、松本仁助・岡道夫訳『アリストテレス詩学・ホラーティウス詩論』岩波書店、一九九七年、三七頁、三九頁。

- (14) ジャック・ザイプス著、鈴木晶・木村慧子訳『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』新曜社、二〇〇一年、一一頁。レイモンド・ウィリアムズ『Ideology イデオロギー』ウィリアムズ著、前掲『完訳キーワード辞典』一四九―一五四頁。

- (15) この場合の「表徴」とは、体系的な観念や心象を、言葉や具体的な事物に置き換えて表わしたものを指す。

- (16) ザイプス、前掲『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』二六頁。

- (17) ザイプス、前掲『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』二六頁。  
(18) ザイプス、前掲『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』二六頁。  
(19) 吉沢和夫「再話」日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍、一九八八年、二九五―二九六頁。  
(20) ジャック・ザイプス著、吉田純子・阿部美春訳『おとぎ話が神話になるとき』紀伊国屋書店、一九九九年、二七頁。

(21) ザイプス、前掲『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』二二―一四頁。

(22) ザイプス、前掲『おとぎ話が神話になるとき』二九頁。

(23) ザイプス、前掲『おとぎ話が神話になるとき』三〇頁。

(24) エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編、前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』紀伊国屋書店、一九九二年、九―一〇頁。アライダ・アスマン著、安川晴基訳『想起の空間 文化的記憶の形成と変遷』水声社、二〇〇七年、一六三―一六六頁、五五七頁。ヤン・アスマン著、安川晴基訳『エジプト人モーセ―ある記憶痕跡の解説』藤原書店、二〇一七年、三四―三六頁。安川晴基『記憶』と『歴史』―集合的記憶論における一つのトポス―『藝文研究』第九四号、二〇〇八年、二八五頁。浜井祐三子「序論 記憶の文化研究に向けて」浜井祐三子編『想起と忘却のかたち』三元社、二〇一七年、三頁、一一頁。

ザイプスの再話研究だけでなく、歴史学者エリック・ジョン・アーネスト・ボブズボウムの「創り出された伝統」、歴史学者ヤン・アスマンとアライダ・アスマンの「文化的記憶」のいずれも、歴史、伝統、記憶が人為的に操作され、創出された文化的所産であることを明らかにする点で興味深い。今日まで継承されてきた仏教的人物の表象は、個人を従わせ、集団の結束を促す、集合的アイデンティティを構築するための再構成された記憶であり、創り出された伝統という側面もある。ゆえに、仏教的人物の表象がメディアを通じて恣意的に再生産され、情報拡散されることは、直接的であれ、間接的であれ、それらを生み出す根源となった宗教や教団の操作された記憶を再生し、権威を強化させること、或いは、それらを批判し、改訂することに結びつく。

- (25) 井上昭洋「ハワイ人とキリスト教 文化と信仰の民族誌学（一四）表象と言説『グローバル天理』第五号（通巻一二五号）二〇一〇年、九頁。  
文化人類学者の井上昭洋は、「表象」の概念がもたらす問題意識について次のような説明をしている。

「表象」とは、イメージやシンボル、記号のようなもの、もしくはそれらを用いた表現であると受け止められるかもしれない。基本的にその解釈で間違いないが、「表象」という言葉が用いられる時、単なるシンボルや記号とは異なる、「誰」が「何」を表象しているのかということが、しばしば重要な問題となってくる。…（中略）…「表象」によつて「あるモノ（対象）」に意味が生成するのだが、「表象」する側が、どの位置からどのような角度で対象に対して視線を投げかけているのかということが、生成する意味に大きな影響を及ぼしている。

- (26) 下村直樹「広告分析における記号論」『北海学園大学学園論集』一三八号、二〇〇八年、八〇―八二頁。吉田香織「フアンタジーにおけるイデオロギー的意味作用の考察―アニメーション研究の見解と展望―」『立命館言語文化研究』二二巻一号、二〇一〇年、一五〇頁。須川亜紀子「二四 コンテンツ分析」岡本健編『コンテンツツールの研究（増補改訂版）アニメ・マンガ・ゲームと観光・文化・社会』福村出版、二〇一九年、九二―九三頁。
- (27) 林淳「総論 近代仏教と学知」末本文美士、林淳、吉永進一、大谷栄一編『日文研叢書 ブッダの変貌―交錯する近代仏教―』法藏館、二〇一四年、七―八頁。
- (28) 大角修『すぐわかる日本の仏教 歴史・人物・仏教体験』東京美術、二〇〇五年、七六頁。
- (29) 森覚「コラム3 ●仏教メディアとしての絵本」今田由香、大島丈史編『シリーズ絵本をめぐる活動② 絵本ものごとたりFIND 見つける・つむぐ・変化させる』朝倉書店、二〇一六年、一三二―一三四頁。大角、前掲『すぐわかる日本の仏教 歴史・人物・仏教体験』七六―七七頁。
- (30) 森覚『仏教絵本の研究 宗祖伝絵本の形成』大正大学、二〇一一年、七四―七五頁。ターナー、前掲「ニューメディア



アと浮遊する宗教」三〇七—三〇九頁。

(31) ザイプス、前掲『おとぎ話が神話になるとき』三〇—三二頁。

(32) 川口久雄「祖師伝・高僧伝の絵解き」鈴木昭英『仏教民俗学大系五 仏教芸能と美術』名著出版、一九九三年、二七八頁。

(33) 菊池良一『中世説話の研究』桜楓社、一九七二年、一四六頁。

(34) リオタール、前掲『叢書 言語の政治① ポストモダンの条件 知・社会・言語ゲーム』九七頁—一〇六—一〇二頁。